



Title	二重被爆の父と生きる
Author(s)	山崎, 年子; 原田, 小鈴
Citation	架橋, 13, pp.27-44; 2013
Issue Date	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/33732
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T14:53:10Z

二重被爆の父と生きた
(Living with a double A-bomb surviving parent)

山崎 年子 (Toshiko Yamasaki)

原田 小鈴 (Kosuzu Harada)

1. 父の被爆、母のこと
2. 父への複雑な思い
3. 兄の死後―父のサポート
4. 父のバトンを受け継ぐ
5. 被爆二世として
6. 質疑応答

「講話者のプロフィール」

今回は被爆二世の証言です。二重被爆者の山口彊さんの長女である山崎年子さんにお話を伺います。講演タイトルは「二重被爆の父と生きる」です。はじめに、彼女の父は遺言として『「二重被爆」という映像作品を作ったのですが、彊さんの紹介もかねて、そのダイジェスト版を見ます。その後、山崎さんに講演をしていただきます。

山崎年子さんは、広島、長崎と二重に被爆した山口彊さんの長女として、一九四八年五月、長崎市に生まれた被爆二世です。一九六七年三月、長崎女子商業高校を卒業後、公証人役場事務員などを経て、一九七四年五月に結婚。年子さんの兄は生後半年のころに被爆し、二〇〇五年二月にがんで亡くなりました。これを機に父の彊さんは語り部活動を始めました。彊さんは二本の記録映画出演や、長崎市内とニューヨーク国連本部にて二重被爆体験の講話活動を二〇一〇年一月に九三歳で亡くなるまで続けられました。二〇一一年一月、イギリスBBC放送がお笑いクイズ番組QIのなかで山口さんを世界一運が悪い男として、ジョーク交じりに取り上げたことが、在留邦人、在英日本大使館の抗議で社会問題化しました。年子さんは、講演やシンポジウムなどを通して、被爆者の父との生活や平和への思いと被爆二世の使命を伝えることを、命をつなぎ平和を紡ぐ、と語っています。現在、夫、長男とともに長崎市にお住まいです。

「二重被爆」(監督 青木亮 「二重被爆」製作委員会事務局 2006年) ダイジェスト版

一九四五年、アメリカ軍は八月六日広島市に、八月九日長崎市に原子爆弾を投下した。これにより広島市では、直接被爆者約三十九万人のうち、約十四万人が年内に死亡し、長崎市では、約二十七万人が直接被爆し、そのうち民間人約七万四千人が年内に死亡した。生き残った者は、戦後被爆の後遺症に苦しみ、社会的偏見、差別に悩まされながらも、被爆の実相を証言し、反核、平和の思いを訴えてきた。そして、広島と長崎の原爆に二度被爆した二重被爆者は二〇〇五年の調査では少なくとも百六十五名いることがわかった。山口彊さんは二重被爆者の一人である。三菱重工長崎造船所の設計技師として出張中であつた広島造船所で被爆。火傷を負つて長崎に戻り、造船所事務所まで報告しているときに再度被爆した。

父の被爆、母のこと

山崎 皆さま、おはようございます。わたしは、広島と長崎で被爆をしました山口彊の娘、山崎年子です。今日はお話を聞いてくださるといふことで本当にありがたいです。これから、わたしが皆さんに本当にお伝えできるか自信がありませんけど、一生懸命お話しさせていただきますので、よろしくお願いします。

いま、父の経歴を紹介してもらつた通り、父は、三菱造船所に勤めておりました。三か月間の広島出張中に原爆に

あいました。広島へは岩永さんという方と一緒に出張に行っていました。岩永さんも二度被爆しておられますが、まだ、ご健在です。岩永さんのお話では、父は忘れ物をして、一人、寮へ戻っていたそうです。父は忘れ物をする人ではなかったのですが、そのときは二回も忘れ物をして、寮へ戻っていたそうです。年を取っても忘れ物はしませんでした。なぜ、あのときに限って、父は忘れ物をしたのかわかりません。もし、あのとき、造船所のほうにいたら、父は死んでいたかもしれません。造船所にいた岩永さんは、原爆が落ちた瞬間のすごい光線に反応し、爆風が来る前に瞬時に机の下に潜り込んだそうです。しかし、一緒にいた課長さんは光線に驚いて、机の下に潜り込む余裕がありませんでした。そして、爆風で割れた窓ガラスの破片が目突き刺さり、失明して、亡くなりました。造船所にいたら、父もそうなっていたかもしれません。はじめは、父はなんて運が悪い人なんだと思っていました。しかし、忘れ物が父を助けたのかな、と思います。父は、造船所の外で被爆しました。父が気が付いたときには、左半身が全部皮がめくれ、大やけどを負っていました。父は被爆した翌日の八日に列車で長崎に帰りました。全身包帯だらけでした。長崎に原爆が落ちたときは、父は造船所に行つて、広島の前爆のことを報告しているときでした。広島の大きな町が、たった一つの爆弾で壊滅したという話を聞いた同僚は、「君は技術者のくせに何を言ってるんだ。頭がおかしくなったのかい。」そう言われているときに、原爆が長崎に投下されました。父は、ガラスが危ないから、窓を全部開けたほうがいいとも報告していたそうです。長崎に原爆が落ちた瞬間、父は机の下に潜り込みました。しかし、全身の包帯は飛び散り、火傷の痕に埃がたくさんくっついたそうです。そして、父は裏山のほうに逃げました。その後、父は高熱を出し、寝込んでしまいました。防空壕で寝ていると、傷口が化膿し、ウジがわいてきたそうです。そのウジを近所の鶏がついばむんです。そのころ、母は五か月の息子の面倒や、街の片づけで手いっぱいだったそうです。父を何とかしようと思つても、薬もないから、どうしようもなかった。そのときのことについて父が話すことはあまりありませんでした。母に父が寝込んでいるときどうしたのかと聞くと、覚えてないと言いました。記憶が飛んでるようで、

覚えていないそうです。その後、父は使い物にならないということで、三菱造船所をクビになりました。

父は英語が話せたので、進駐軍のマリン部隊で通訳として働くようになりました。そこで、若い海兵隊の人たちと親しくなりました。父は口には出しませんでしたけど、原爆を落としたアメリカのことは快く思っていなかったようです。そんなとき、若い海兵隊が、父に手紙の代筆を頼んできました。その当時、アメリカでは教育が隅々まで行き届いていなかったようで、読み書きができない人がたくさんいたそうです。彼らの手紙は「お父さん、お母さん、お元気ですか」から始まったそうです。それは日本人が書く手紙と何ら変わりませんでした。父はみんな同じ心を持っているんだと感じたそうです。言葉も人種も違うけれど、みんな、純粋で、飾り気もなく、良い若者たちばかりで、心は一緒なんだと感じたそうです。夜になると、海兵隊の人たちが家に遊びに来ていたそうです。それから父は、アメリカ人だから、という気持ちはまったくなくなりました。

わたしは、昭和二十三年、戦後三年に生まれました。お母さんのお腹の中で被爆した人の多くは、奇形児で生まれてきました。何らかの障害を持って生まれてきたそうです。わたしの父も母も被爆者です。被爆から三年が経過していましたが、母は「いま、赤ちゃんを産んだら、障害児が生まれてくるから、産まないほうがいいよ」と言われたそうです。しかし、母はわたしを産んでくれました。わたしが、なぜ産まないほうがいい、と言われたのに、産んだのかと聞くと、母は、「人は人の子として生まれる。自分はそう信じて生んだ」と言うんです。わたしは母のその信念はすごいと思います。

母は黒い雨に打たれながら、街の掃除や防空壕を掘ったりしていました。ぬるっとしていて、体中にまとわりつくような気持ち悪い雨だったそうです。母は、黒い雨に打たれてから、二、三か月後に高熱を出して入院しました。戦後七年目の昭和二十七年に妹が生まれました。妹を妊娠しているとき、母は妊娠中毒が酷かったそうです。栄養失調の人のようで、お腹だけ膨れている感じでした。いつも吐いていて、つらそうでした。その当時は、妊娠中毒という

概念がなく、特に治療を施されることはありませんでした。医者から中絶を勧められたそうですが、母は断って、妹を産みました。おそらく放射線が一番影響していたと思います。

わたしが話すとき、父はいつも右耳をわたしに近づけてきました。はじめはなぜかわかりませんが、母が、父は左耳が聞こえないと教えてくれました。原爆で内耳が破裂したのです。そして、父はいつも眼鏡をかけていました。近眼かと尋ねると、父はわからないと言いました。実は、原爆の光が原因で白内障になったことが晩年にわかりました。どうりで、父はどの眼鏡をかけても合わないと言っていたのです。わたしが十二歳くらいのころから、夏になると、父の髪は抜け落ち、禿げるようになりました。父は原爆の後遺症である火傷痕が酷く、いつも包帯を巻いていました。父は白血球減少症という病気にもなっていました。そのため、いつも会社の健康診断では、白血球が少ないと診断されていました。このまま働いていたら、いつ死んでもおかしくないから、仕事を辞めて、治療に専念することを医者から何度も言われました。しかし、父は両親と子ども三人を養うためには働かなければいけませんでした。父は、クビにならないために、白血球の数値をこまかく見てくださいと、医者に何度かお願いしたそうです。わたしは、父が弱音や後悔を口にするのを聞いたことがありませんでした。だから、父親というのは強いのが当たり前だと思っていました。いまとなつては、本当に申し訳ないと思いますが、当時は父の包帯姿を見ても、同情の気持ちはなく、おぞましいという気持ちがありました。父はわたしが生まれてから三年間、英語の教師をしていました。そのころ、三菱では技術者不足だったそうです。原爆症によって、クビになったり、自主退職をした人が多かったためです。ところが、技術者不足になって、以前働いていた人たちに再雇用の通知がありました。父は、一度クビにされたところに再就職するのは嫌だったそうです。そして、わたしが一歳のころに高島中学校に赴任しました。高島中学校は小さな島にあり、父はそこで五年間働きました。そのころ、三菱から父に再雇用の誘いがあり、家族のことを考えたら、長崎に戻って働いたほうが良いという決断に至ったそうです。父は教師を辞めて、三菱に再就職しました。

母は島で暮らすのは嫌だったようです。長崎に帰れるということでも喜んでいました。ちょうどそのころ、妹が生まれました。母が妹が幸運を運んできたと言っているのを聞いて、わたしはとても傷つきました。わたしは役に立たない子なんだ、いらぬ子なんだ、と思いました。そして、わたしは無意識のうちに母に心を閉ざすようになりました。母とわたしの間に溝ができました。母はわたしのことも可愛がつてくれましたが、わたしが母の愛情を受け取りませんでした。なぜ母から、わたしはひねくれていると言われるのかわかりませんでした。母が認知症になって、はじめてわたしがいまままで心を閉ざしていたことに気づきました。母は七十歳くらいから、徐々に認知症の症状がみられていました。しかし、わたしたち家族は、認知症と認めたくありませんでした。母はただ疲れているだけだ、イライラしているだけだ、と思っていました。しかし、それが認知症の兆候でした。それまで、わたしは母の気持ちを跳ね返し続けていました。そうすると、母がわたしを頼るようになりました。気がつくとも、わたしは母の気持ちを受け入れられるようになっていました。わたしは兄から、いつも家族から離れていると言われました。確かに、わたしは家にいるより、外で遊んでいるほうが楽しかったです。

父への複雑な思い

わたしが中学生のころ、被爆者の山口仙二さんが一生懸命平和活動をしていました。その姿を見て、父は「素晴らしい。それに引き換え、自分は二度も被爆しているのに、なにもしていない」と言っていました。被爆者としての責務を自分に問いかけたと思うんです。そして、ほくも平和活動をしようかと思っているって家族に話しました。家族全員が反対しました。父は白内障で、一側聾で、白血球減少症で、戦後十五年まで髪が抜けつづけ、火傷の後遺症も

ありました。しかし、一見した感じでは健康そうな人でした。そんな父が平和活動をしたら、もしかしたら「二度被爆しても、元氣だから、原爆は恐ろしくない」と思われるかもしれない。そうしたら、山口仙二さんたちが積み上げてきた平和活動を父が壊すことになるから、と言って反対しました。父は家族の反対を押し切ることはしませんでした。わたしはだつたら、そうしたかもしれない。なぜなら、被爆者の人たちは、差別をされていたからです。しかし、わたしたち子どもはそのことは知りませんでした。たぶん、両親が守ってくれたんだと思います。わたしの友達の両親や祖父母も被爆者が多かったので、被爆が特別なこととは思わず育ちました。差別があるということを考えてことがありませんでした。あるとき、都会では被爆手帳を持っているだけで差別される、ということを知りました。受けました。被爆者はなにも悪いことをしていないのに、なぜ、同じ日本人が差別をするのかわかりませんでした。わたしが中学生のころから、父が二重被爆者ということで、テレビや新聞社から取材が来ていました。彼らは、戦争反対や核兵器廃絶を訴えるために取材をしているのではなく、ただ父が珍しいから取材をしていました。わたしはそれにとっても疑問を持ちました。きつと、彼らはただ珍しいから、という素朴な気持だったんだと思います。わたしは被爆者の気持ちになつて、もつと深いメッセージを込めて取材をしてほしかったと思います。わたしは父が取材に応じるのにも反対しました。

いまから三十年くらい前に、父は語り部をしようと、また言い出しました。いまは亡き、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世が日本に来られ、法王様が、戦争というものは人間がしたことですから、人間がとめることができる。戦争をなくすことができる、とお話しされたそうです。その演説を聞いて、父は語り部をしようと思ったようです。父が語り部をすると言ったとき、わたしはまた反対しました。父は左耳が聞こえないため、左側から話しかけられても、気付かないんです。そのため、失礼だ、と言われたことがあります。一側聾のため、誤解を招いて、たいへんになるかもしれないから、反対しました。父はそれ以上のことは言いませんでした。わたしと妹は結婚をして、両親に子育

てを手伝ってもらっていましたが、両親のことをあまり気に留めなくなりました。

父は若いころから短歌を書き続けていました。核兵器廃絶についての短歌もしたためていました。そして、いつもその短歌を新聞に投稿していました。二度も平和活動に反対したので、わたしはその新聞に載った短歌を見ると、後ろめたい気持ちがありました。これは兄も同じ気持ちでした。母が認知症になったため、兄は両親と暮らすことになりました。原爆症の父と、認知症の母を二人で生活させるのは無理だと判断したからです。父は耳が聞こえないので、電話には絶対に出ませんでした。電話をとる母の姿を見て、父が誰からの電話かと聞くと、わからない、と言うことが何度ありました。これでは父も不自由だろうということで、兄と一緒に暮らすことになりました。父は家族のためには一生懸命働いて、自分のことは何一つ贅沢していませんでした。父は短歌を書くことと、本を読むことが大好きでした。兄は、これからは父がしたいことをすればいい、と思っていたそうです。父は被爆者としての責務を果たしていないことが心のわだかまりとなっていたようです。兄は自分が父をサポートして、父に平和活動をさせようとしていました。その矢先、兄に大腸がんが見つかりました。二〇〇四年五月に大腸がんが見つかったとき、もう長くないことを兄は悟っていました。もう、両親と一緒に住むことはできないと思ったようです。兄は、具合が悪いのに、両親を預かってくれる老人ホームを探しましたが、認知症の母を預かってくれる施設はありませんでした。そんな折、わたしの家の近所のアパートに空きが出ました。しかし、その一室の室内清掃がなかなか終わらず、そのまま三か月が過ぎました。そうしたら、妹もその空き部屋に気づいて、父にその部屋に引っ越しすることを勧めました。父はとても喜んでいました。兄も満面の笑みで喜んでいました。あの兄の顔はいまでも忘れられません。兄は具合が悪いのに、父の引っ越しを手伝いました。その後、兄は入院し、わたしに、「年子、後は頼んだよ」と言いました。わたしは「まかせて」と言いたかったけれど、言いませんでした。「早く元気になって、お父さんと一緒に暮らしてね」とわたしは言いました。母はよく、「娘と暮らすより、息子と暮らすほうが幸せだ」と言っていました。娘は話し相手になるけれ

ど、娘の主人は他人だから気が引ける。でも、息子だったら気兼ねがない、と言っていました。

兄は翌年の二〇〇五年二月に亡くなりました。父は長男を一歳にならないうちになくしているんです。そのときは戦争中で、薬はすべて軍が持っていました。薬がないため、長男は風邪をこじらせて亡くなったそうです。二人の息子を亡くした父は自暴自棄になりました。わたしと妹に対して、邪険な態度をとったことはいままで一度もないのに、「お前たちに何ができるか」と言われたこともありました。わたしの料理もおいしいと言ってくれていた父が、「こんな料理を旦那に食べさせてるのか」と言ったこともありました。わたしは父の心のうちに何が起っているのか、わかりませんでした。そして、わたしはわたしなりに一生懸命にやっていたので、頭にきました。父のアパートを出て、家に帰るとき、夜空を見上げて、何度も「わたしの人生は何?」と思いました。あるとき、わたしは父に、「お父さんは永遠にわたしたちのお父さんだからね」と言いました。父は黙って聞いていました。翌日から、いつもの父になりました。

わたしたちは兄の死という悲しみを乗り越えてきました。ときには、両親の世話に疲れて、兄がいてくれたら、と悲観的に思うこともありました。そのたびに、「人のせいにはしない。これは自分のためなんだ」と自分に言い聞かせました。「わたしが後悔しないように、両親の力になるんだ」と心に誓いました。自我を表に出さないように決めました。でも、くじけるんです。反対に、父はあるがままを受け入れて生きていた人でした。わたしは後悔はしていません。ただ、皆さんにはわたしのような気持ちを味わってほしくありません。必要ないことです。わたしと父のような関係の親子が出てきてほしくありません。わたしのよう無駄な体験を世界中の誰一人として、体験させたくありません。

兄の死後―父のサポート

兄は生後五か月で被爆し、小児結核を患いました。そして兄が小学一年生のころ、余命五か月と宣告されました。そのとき、高島に住んでいたわたしたちは、船に乗って、長崎の病院に来ていました。長崎の小児科で一番有名な先生に診てもらったのです。病院の帰り道、両親は兄の余命について教えてくれませんでした。わたしは雰囲気でもわかりました。何か深刻なことがあるんじゃないのか、と。途中、一匹の子犬が兄にまとわりついて離れませんでした。動物が大好きだった兄は、その捨て犬を抱っこして、連れて帰ると言いましたが、船には犬を乗せられないからと言われ、諦めました。しかし、犬はずっとついてきました。その様子を見て、両親は、あと五か月の命である兄が飼いたいのなら、ということでもその犬を飼うことにしました。その犬は立派なシエパードになりました。

あるとき、そのシエパードがやくざの小指を噛んでしまいました。それから毎日、チンピラが治療費の請求に来るようになりました。それが警察沙汰になって、父は警察に呼ばれました。警察からは「あなたは先生だから、争いは避けて、穏便に対応したほうがいい」と言われたそうです。結局、その犬は飼うことができなくなってしまい、親戚に預けることになりました。余命五か月だった兄は、五十九歳まで生きました。わたしはあの犬から命をもらったんじゃないかと思います。兄は、亡くなる二三年前の健康診断で、胸に影があると言われました。小児結核だったことを告げると、その影は小児結核の痕ではないと言われたそうです。先生にはそれ以上聞きませんでした。放射能に間違いないと思います。

兄の体には九つのがんがあったそうです。手術をしたら、全身にがんが広がっていたことが分かりました。放射能を浴びた兄は多発性のがんだったわけです。父は兄のために仏画の塗り絵をするようになりました。また、新聞に載っていた浦上天主堂の被爆マリア様の絵も描いていました。わたしは父が描いたマリア様を見て、心が締め付けられ

ました。わたしはそれまできれいな姿のマリア様を想像していましたが、被爆したマリア様は顔が真っ黒に描かれました。父はその被爆マリア様の絵を昏睡状態の兄に見せると言っていました。しかし、わたしが「兄は昏睡状態だから見れるわけじゃないでしょう」と父だけ病院へ連れて行きました。寝ている兄を見て、父は声が出ませんでした。

わたしが父の背中を叩くと、小さな声で「捷利かつじ」と兄の名前を呼びました。すると兄は大きく目を開けて、声にならない声を上げました。その声は何だか、「お父さん、お母さん、ごめんさい。もう自分は頑張れない」と言っているようでした。その翌日、兄は亡くなりました。そして父は決心しました。放射能の恐ろしさ、放射線の影響がいかに怖いものかということ、若い人たちに伝えなければ。

ちょうどそのころ、申し合わせたように、二重被爆の映画を撮った稲塚社長から手紙が来ました。父は、これだ、と思い、すぐに返事を書いていました。翌年、稲塚社長が父の取材のために長崎に来られました。そのとき、父が「核兵器廃絶は、アメリカに行つて言わないと伝わらないと思う」と言うと、稲塚さんが、「じゃあ、ニューヨークの国連で訴えましょう」と提案してくれました。そのころ、わたしの娘が初めての赤ちゃんを身ごもっており、わたしはできただけ、彼女のサポートをしてあげたかった。わたしの母は心臓が悪く、わたしの初産のときに心臓発作で倒れました。そのため、わたしの出産のときは、義理の母がわたしをサポートしてくれましたが、とても気兼ねしていました。一生懸命してくださいださればくださるほど、気兼ねがありました。そういう体験があったので、わたしは自分の娘の出産のサポートをしたいと思っていました。

娘は「おじいちゃんをサポートして」と言ってくれましたが、出産日が重なったため、父の国連行きには、わたしの息子に付き添ってもらうことになりました。息子はここ（長崎大学）の卒業生です。息子は、東京の建設会社で働いていました。建物の耐震強度について問題になっていたころで、息子も仕事がたいへんようでした。息子は忙しい中、時間を作つて、父と一緒に国連へ行つてくれました。国連ではいろんな経験をしたそうです。帰ってきた父か

ら、「お前じゃ力不足だった。孫で良かった」と言われました。大好きな孫と一緒に行ってよかったです。

それから、父は語り部をするようになりました。中学校での講演も頼まれましたが、わたしは運転ができないし、父も元気がなかったので、行けませんでした。なかなか積極的に活動はできませんでした。二〇〇六年、国連に行つた年の十二月に父ががんだということがわかりました。末期でした。高齢のため、手術もできませんでした。レントゲンを見せてもらうと、全身にたくさんのがんができていました。胃は組織検査しなくてもはつきりがんだとわかります、と先生がおっしゃいました。母と兄のがん治療を見てきた父は、つねつね、自分は自然に死にたいから、がんになつても、抗がん剤治療は一切しない、と言っていました。わたしは父にがんだとは言いませんでしたが、父は自分のがんだと知っていたと思います。でも、わたしが騙っていたので、わたしを思つて騙されたふりをしていただけだと思います。がんと分かつてから、わたしは父と同居するようになりました。父は母から「孤独を愛する男」と言われていました。父は短歌を書いたり、本を読んだりするのが好きでした。狭いアパートでしたが、そのアパート暮らしが気に入っていたみたいです。だから、そこを出てうちに連れてきたときは、何だか不満げのようでした。

父の講演は二〇〇九年六月に留学生にしたのが最後になりました。父は点滴を打ちながら、講演をしました。苦しいとも言わず、無理している様子もありませんでした。無理を隠して頑張つてくれて、わたしも気分的に救われました。最後の講演が終わつてから、父の体力は一気に落ち、活動は一切、終わりにしようと言っていました。

二〇〇九年三月に父は二重被爆と認定されました。毎日新聞の宮下記者に、「被爆手帳には二重被爆と書かれていないけれど、これは歴史的事実として記録しておく必要があると思われませんか」と言われました。それを聞いたとき、その通りだと思いました。さらに宮下さんは、「もしよろしければ、自分が申請します」と言ってくれました。そして、申請から半年が経つたあと、「二重被爆」と認可されました。認可されたときには世界中に報道されるなんて思つてもいませんでした。わたしが畑仕事をしているときに、宮下さんが預かつていた原爆手帳を持つてこられました。

このことは記事にしたいと最初から言っていたので、取材も断りませんでした。ところが、宮下さんがわたしの写真撮りたいと言いい、わたしは「写真は父だけでいいでしょう」と断ったのですが、結局、わたしの写真も撮って帰られました。翌日、新聞記事に載ったわたしの写真を見て、友人から「お前は日本の恥だ」と言われました。確かに、すっぴんのわたしは酷い顔をしていました。真実の前には化けの皮は剥がされるんだと思いました。

父のバトンを受け継ぐ

四月にサンマリノ共和国から思わぬものが届きました。平和活動を頑張った、ということ、表彰状とプレゼントが届きました。それまで、わたしたちは、まだまだ責務を果たしていないように思っていました。父も体力がどんどん落ちていってからです。もう仕方ないなあと思っていたんです。しかし、サンマリノ共和国からプレゼントが贈られてきたとき、勇気をいただきました。神様がわたしたちに頑張りなさい、と応援しているように感じました。父もわたしと同じように感じていたようで、「起死回生の思いだった」と語っていました。原爆に二度あつた父は、それまで神も仏もない、という気持ちでいたようです。自分のことを応援してくれる人もいるんだ、とわたしたち親子は勇気をもらいました。

二〇〇九年にアメリカの平和活動家、キャサリン・サリバンさんと会いました。また、作家のペレグレイノさんとキャメロン監督にも会いました。日本も戦争中は敵国に酷いことをした、と両親から聞いていました。だから、わたしも父も原爆を落としたアメリカに対して憎しみを持ってなかった。父に引導を渡してくれたのはアメリカの皆さんです。キャメロン監督が父に「役目はもう終わりましたよ」と言ってくれました。父はこんなうれしいことはな

かったと思います。一瞬のうちにいろんな思いが消えたんだと思います。皆さんが父を支えてくれて、皆さんが父を天国に送ってくださったんだと思います。死んだら終わりと思ってるかもしれないけど、これが始まりなんです。「向こうに行ったら平和活動をしている人たちを応援してよ」と言ったら、父は「もちろん」と低い声で答えてくれました。その声は、父はまだまだ元気なんだ、まだ生きるんだ、と思えるくらいに力強かった。父が亡くなるときにはいろんな思いがありました。父は皆さんが自分のバトンを受け取ってくれて、感謝していました。

亡くなったあと、BBC放送のことがありました。まだまだ被爆者の気持ち伝わっていないようでした。被爆者のようなつらい思いはしなくてもいいことです。無駄なことです。被爆者がこれ以上増えることだけはやめてほしいです。

日本で原発問題も起こりました。これから日本を背負っていく若い方にお伝えしたい。父は大量の放射能に晒されました。被爆した体で、被爆地で人を探したり、お葬式をしたりして、大量の放射能に晒されました。生殖機能が四十歳前くらいからだめになったそうです。放射能・放射線の影響は怖い。若い人は、結婚して子どもを産まなくてはいけない。子孫が繁栄しないとこの世界は終わりです。父とわたしは、一人でも多くの人に放射能の恐ろしさをわかってほしいと思います。父は「人間の住む世界に核はいらない」と言っていました。わたしたち家族は、これは宿命だと思っています。しかし、核の恐ろしさは他人事だと思わないでください。未来を考えて、人間が人間らしく生きられるような世界を築いてください。平和に向かって、核の廃絶に向かって、頑張ってください。今日はこれで終わります。ありがとうございます。

被爆二世として

原田 皆さん、こんにちは。山口彊の孫の原田小鈴です。今日は機会がありましたのでお話しさせていただきます。わたしは被爆二世ですけども、祖父母が被爆したことを言わなければ、知らないまま生きていたと思います。生まれて物心がついたときから、祖父母は外見も普通の優しいおじいちゃんおばあちゃんでした。皆さんの中にも被爆三世の方がいると思います。先日、講演したあとに、学生の方から声をかけられて、背中を押されたように感じました。少しお話させていただきます。

わたしが、祖父母が被爆者だと知ったのは小学校のときでした。夏休みの宿題で、被爆者の被爆体験を聴いて、作文や絵を描く、というものがありました。わたしが尋ねると、祖父母は話してくれました。たくさんの方が大火傷を負い、性別も判断できないくらい皮膚は足元まで垂れ下がっていて、地獄のような光景だったそうです。当時何を感じていたのか、いまではわからない、と言っていました。爆風で祖父は左半身に大火傷を負いました。ただ家族のために死ぬわけにはいかない、家族のために生きることしか考えていなかったと言いました。話を聴いた小学生のわたしは驚き、原爆の恐ろしさと、二人が被爆者として大きな傷を心に負っていたことを初めて知りました。毎年、八月九日が近づくと、祖父が原爆資料館や原爆絵画展に連れて行ってくれ、その帰り道に原爆体験を話してくれました。祖母は昔は原爆のことを話してくれていましたが、歳をとるにつれ、原爆のことはつらくて悲しいから思い出したくない、と言っていました。原爆が落ちたとき、伯父は生後六か月でした。祖母は、まだ話せないし、歩くこともできない伯父を抱えて、食料も少ない混乱状態の中、子育てをしました。母親としての強さを感じます。

わたしの母は二重被爆した祖父と、長崎で被爆した祖母のあいだに生まれました。祖母は母を妊娠しているときに、奇形が生まれるから、産むのをやめたらどうか、と言われたそうです。それでも祖母は信念を持って母を産み、育てました。祖母だけではなく、被曝した体に不安を感じながら出産した母親はたくさんいたと思います。このような心労は戦争が招いたことです。祖母は焼き魚の焦げた臭いに敏感に反応し、嫌がっていました。たぶん、当時のたぐさ

んの死体を焼いている臭いが脳裏に焼き付いていたのだと思います。祖父は年老いてがんに侵された体で、母のサポートのもと、国内外の取材や語り部活動を行っていました。母は左耳が聞こえない祖父の左耳になる、と言って、祖父を支えてきました。祖父ががんということは本人には隠していました。祖父は体の調子も悪く、声も出なくなっていて、そのストレスを母にぶつけて困らせてもいました。母は祖父の心身を娘として支えていました。

祖父は講演前日に倒れても、点滴を打って講演したり、吐血が止まらないのに、中立国の取材だからと、スイスの取材を気力でのりきっていました。母はときどき、祖父と家族に悟られないように、一人で泣いていました。晩年の祖父がやってきた平和活動は、母なしではできませんでした。祖父と母の親子の絆を近くで見、家族のあり方を考えさせられました。亡くなる前に、祖父は言いました。「わたしのひ孫をみんな大事に育てなさい。すべての人間には良心がある。皮膚の色や言葉が違っても、良心は環境や言葉を越えて存在しているから、わかりあえる。ほくの思いを君たちにバトンタッチするから、あとはよろしく。」

祖父母が体験したことは、本来なら体験しなくていいことです。母が祖父を支えてきたように、今度はわたしが母を支えます。命をつないでくれて、国内外で平和活動をされている方々との出会いを作ってくれた祖父に感謝します。核廃絶を訴え、祖父母の被爆体験を伝えていく役目がわたしにはあると思います。以前は二重被爆者の孫として生まれたことを重荷に感じていましたが、皆さんの中にも被爆三世の方がいるということを知って、力をいただきました。このような機会を与えてくれた安部先生と、先日、背中を押してくれた学生さんに感謝します。ありがとうございました。

質疑応答

——被爆者は就職のときなどに、社会的差別を受けてきたと聞きますが、被爆二世、三世は差別を受けたことがありますか？

山崎 一度もないです。長崎では、わたしの知るかぎり、差別を受けたという話は聞いたこともないです。被爆者の方たちは見た目の外傷で忌み嫌われていたそうです。しかし、わたしたちは差別を受けたことはありません。

父は原爆の後遺症で左耳が聞こえなくなりました。わたしも妹も中耳炎で十三回鼓膜を切っています。次、鼓膜を切ったら、聞こえなくなる、と言われましたが、わたしも妹もかろうじて助かりました。わたしは乱視と遠視で、眼鏡を外すと、壁が湾曲して見えます。父の遺伝子をもらっているんじゃないかなあと思っています。また、三年前の検査で、わたしは白血球が少ないことがわかりました。通常は四〇〇〇〜八〇〇〇の値らしいですが、わたしは三七〇〇でした。わたしは病院嫌いで、絶対、病院に行きたくない、と思っていました。いろんなところで、影響が出ているんじゃないかと思えます。

——一番幸せだったことはなんですか？

山崎 わたしは父親の子でした。父におおらかに育てられたわたしは能天気で、破天荒なところがあります。父はいろんなことを話して教えてくれました。楽しいことは特別にないんですけど、わたしが何を言っても叱られたことがない。全部受けとめてくれたことがわたしの最高の思い出です。

〔追記〕 なお、本稿は2011年6月22日に行われた平和講座の講話内容をテキストに起こしたものである。